

嘔吐農薬から有毒ガス

自殺男性治療中 医師ら54人手当て

21日午後11時ごろ、熊本市長嶺南2、熊本赤十字病院(東大弼院長)の救命救急センターで、農薬を飲んで搬送された熊本県合志市の農業男性(34)が、処置中に嘔吐し、嘔吐物から刺激臭を伴う塩素系有毒ガスが発生した。医師や看護師、外来患者、付き添いの家族ら54人がガスを吸い込むなどして目やのどの痛みを訴え、うち外来の女性患者(72)が呼吸困難のため重症となり、この女性を含む10人が入院した。44人は軽症。男性は農薬中毒による死亡が確認された。県警は、男性が農薬を飲んで自殺を図ったとみて経緯を調べている。(関連記事23面)

熊本赤十字病院

県警や消防、病院の発表によると、男性が飲んだのは、土壌を消毒する際に使われる劇物指定の農薬「クロルピクリン」で、これが気化したらしい。

21日午後10時ごろ、「夫が薬を飲んで倒れた」と男性の妻から通報があり、消防署員が、自宅玄関付近に

倒れている男性を見つけ、辺りには刺激臭が立ちこめ、農薬を飲んだことによる中毒の疑いがあるとして救命救急センターに搬送した。

男性はセンターの処置室に運ばれ、胃洗浄をしようとした際に吐いた。刺激臭を伴う有毒ガスが施設内に

広がり、処置にあたった医師ら病院職員31人と、救急外来の患者や付き添いの家族23人が体調不良を訴えた。うち約20人は処置室を含む治療室、残りはセンター内の待合室にいた。無事だった病院職員がこの54人をロビーに避難させ、点滴や酸素吸入などの応急処置をした。

重症の女性は、男性から約10メートル離れた所におり、もともと腎不全と肺炎の重い症状があった。男性の妻(36)と母親(60)、治療に当たった男性医師らが入院した。軽症者には1歳児2人、3歳児2人も含まれている。

県警は、男性の自宅近くの畑からクロルピクリンの空の瓶を発見。男性の父親から事情を聞いたところ、通報前に男性からクロルピクリン特有のにおいがすることに気づき、問いただすと、男性は「瓶は納屋に置いていた」と話した、と説明した。父親は、納屋で液

クロルピクリン 畑の土中の害虫駆除などに使われる農薬。1948年に農薬登録された。劇物に指定。液体で揮発性が高く、気化すると、窒息性の有毒ガスになり、多量に吸引すると重度の場合は死亡する。催涙ガスとして化学兵器に使用されたこともある。救急施設では、毒物を誤飲した患者を治療する際、スタッフにマスクを着用させ、患者の着衣を脱がして診療するなどのマニュアルを整備しているところもある。農水省によると、国内の出荷量は年間80000、90000キログラムという。

が少し残ったクロルピクリンの瓶を見つけ、近くの畑に捨てたという。納屋には農薬類を置いていた。同病院は22日午前中、センターを閉鎖した。

井部長は「農薬の種類が

薬物名分からず 熊本赤十字病院の井部長(58)らは22日午

前、院内で記者会見し、患者を受け入れる際に、消防から「クロルピクリン」ではなく「ピクリン」と伝えられていたことを明らかにした。このため、薬物への対処方法を日本中毒センターのネットで検索できなかったという。

井部長は「最善ではなかったかもしれないが最大限の対応だった」と述べた。



刺激臭 病院に悲鳴



嘔吐農薬から有毒ガス

防護服の救助隊「触るな」

深夜の救命救急センターが、パニックに陥った。熊本赤十字病院(熊本市)で21日、農薬クロルピクリンを飲んで搬送された農業男性(34)の嘔吐物から塩素系有毒ガスが発生し、患者や医師ら54人が次々に体調不良を訴えた。せき込んで屋外に飛びだす患者、ガスマスクと防護服姿で突入する救助隊……。「嘔吐物には触るな」「一体何が起きたのか」。患者を救うはずの病院で起きた事故に、悲鳴と怒声が飛び交った。(本文記事1面)

男性が母親(60)らに付き添われ、同病院の救命救急センターに運ばれたのは同日午後10時50分ごろ。約10分後、救急副部長の高村政志医師(48)が、1階の処置室で、苦しそうな表情を見せる男性の胃を洗浄するた

毒物を飲んだ患者の胃の内
容物が二次被害を起こしたケ
ースは過去にもある。
1998年8月、新潟市内
の木材防腐処理会社の社員ら
が被害に遭ったアジ化ナトリ
ウム混入事件では、新潟市民

有毒ガス発生
「常に想定を」

病院で胃洗浄を担当した医師
や看護師ら6人が、胃の内容
物から出たと見られる有毒ガ
スで目まいや吐き気などを訴
えた。
同病院救命救急センターの
広瀬保夫医師は「何を飲んだ
か分からない以上、有毒ガス
が発生することを常に想定
しなければならぬ。特に
異臭がする場合、ゴーグルや

防護マスクの着用と処置室の
換気が大切だ」と指摘してい
る。
日本中毒学会理事の篠崎正
博・和歌山県立医大教授も
「毒物や状況によって対応が
分かれるのが現状。患者が吐
いた場合などを十分に想定し
ていない施設が多いだろう。
今後、学会での検討が必要だ
と話している。

来患者の一人は「何が何だ
か分からず、とにかく外に
出ることだけ考えた」と青
ざめた表情で話した。
高村医師は意識が遠のき
倒れそうになりながら一時
処置室を出たが、すぐに治
療に戻ろうとした。しかし、
強烈な刺激臭が阻んだ。「塩
素をきつくしたようなにお
いで、息が出来ず目も開け
られなかった」
母親は処置室で男性のそ

ばから離れようとせず、制
止を振り切り、「何とか助
けて下さい」と泣き叫んだ
が、引きずり出されるよう
に避難させられた。
現場に急行した熊本市消
防局健康消防署の5人によ
る特別救助隊はガスマスク
を付け、全身を防護服に包
んで室内に入った。中和剤
を散布して希釈し、送風機
を使って換気。同消防署の
岡村隆・警防2課長(57)は

「目の粘膜をやられ、充血
した被害者が多かった。重
症患者を搬送する頻度が最
も多い病院で発生すると
はと表情をこぼらせた。
一夜明けた22日朝、来院
した市内の会社員男性(24)
は「突然騒然となり、何が
起こったのか理解できな
かった。今のところ異常はな
いが、念のために診察を受
けにきた」と不安そうに話
していた。

▲有毒ガスを吸い込んで倒れ
た患者の対応に追われる病
院関係者ら(22日午前2時
41分、熊本市の熊本赤十字
病院で)＝門岡裕介撮影